

第1回 HYOGO グローバル人材育成検討委員会 議事録（主な委員意見）

1. 日 時 令和5年10月30日（月）10：00～11：30

2. 場 所 県庁2号館庁議室

3. 発言概要

【伊庭委員】

- 留学に関しては、9,000人規模の本学では、短期・長期含めてコロナ禍以前は400名ぐらいが留学していたが、コロナでゼロになった。コロナが五類になり、留学が再開され、500名に目標を上げて取組んでいるが、円安の影響が非常に大きい。経済的になかなか留学できないという学生には、奨学金を用意し、できるだけ行きやすくしている。アメリカが高くなっており、例えば英語圏で勉強したいという学生は、英語を公用語としているヨーロッパの 아일랜드 や マルタ共和国の大学に留学するという選択肢も用意している。
- グローバルというと英語圏への留学をイメージしがちだが、本学の場合、世界各地の40大学ほどと協定を結んでいるほか、エージェントとも契約し、単位互換ができる大学をさらに120校くらい設定している。
- 円安に関しては、大学としても、奨学金（返済不要）を出したり、留学中は本学の授業料を低く抑え、留学先の大学の授業料が払えるような工夫をしている。

【山口委員長】

- 留学支援には、「トビタテ！留学 JAPAN」や、正規の交換留学であれば、業務スーパー ジャパン ドリーム財団の支援事業がある。ドリーム財団は給付型で、正規の交換留学先の大学で単位を取得するという条件があるが、当該事業で留学している学生は多いようだ。
- 交換留学は、自身の大学の学費を払えば、留学先の大学の学費を払わなくてよい。留学は、自身の大学の学費を払い留学先の大学の学費を払わないパターンと、自身の大学の学費を払わず留学先の学費を払うパターンがある。英語の成績が悪いと留学先の大学からさらに課金があり、例えば、本来年間400万円ぐらいのところ、日本人専用の授業を設け、450万円や500万円になる場合がある。大体今アメリカ留学400万円ぐらいである。交換留学になるとそれが滞在費だけになるので、半分ぐらいになる。

【伊庭委員】

- 交換留学は、本当によくできる学生でないと、なかなか受け入れてくれない。少し足りない学生に関しては、もう少しお金を払う必要があり、大学がどれだけ援助するかということになる。せっかくだ行ってるんだから頑張るように、奨学金を出したり、日本の大学の方の授業料を免除というような工夫をしている。

【志摩委員】

- 県立高校も30校前後は独自のプログラムで海外研修を実施していて、本校もずっとやっていたが、コロナで中断していた。今年度再開しようと、ずっと行っていたワシントン

州で検討したが、1週間から10日で70万円から80万円の費用がかかるため、行き先を変更しシンガポールへ行った。それでも1週間ほどの滞在で40万円前後かかった。海外研修が非常にやりにくい状況になっているが、それぞれ長く続けてきたノウハウがあるので、費用面が少しでも改善すれば、またたくさんさんの学校で復活すると思う。

- 長期留学は、やっぱり少ない。今年度、「トビタテ！留学 JAPAN」で留学する例が出てきたが、400万円もかかっているのが驚いた。1年間行って、200万円から300万円とっていた。親の立場としては、200万円から300万円で留学させて欲しいと子どもが言ってきたら、「ん？」とってしまう。
- 高校生の留学者数が増えない要因は、大学受験を控えていることだと思う。高校に入学して留学には、1年生の途中からはあまりいかない。やっぱり部活もしたいし、いろんな高校生活を楽しみたい。2年生の途中から1年間となると、もちろん行ってる間の単位互換は認めてもらえて同級生と同じタイミングで卒業はできるが、例えば9月から行って、翌年3年生の9月に帰ってきたとしたら、そこから受験勉強しないといけない。受験勉強が遅れるのではないかという心配もあると思う。費用面だけじゃなく、高校は大学と違って3年しかないのも、そういう点も二の足を踏んでる要因の1つと感じている。
- 本県では、たくさんさんの学校がSSHの指定を受けている。本校もそのうちの1つで、今4期目の指定をいただいている。各学校、年を追うごと期を追うごとに、非常に充実した取組内容となっている。手を挙げる学校が増えるのはいいが、非常に先生方に負担をかけている。担当教員や担当部署の負担が非常に大きいので、いろんな手当とかサポートがあれば、もっとたくさんさんの学校で取組が進んでいく。
本校は探究を中心に据えてやっているが、生徒からは大学に行って非常に役に立つという声をよく聞きくので、役に立つのは間違いないが、負担の部分が大きいので、サポートがあるとさらに広がるのではないかと思う。

【山口委員長】

- どの時期に派遣するかで、大学の場合は就職活動が1年遅くなり、高校の場合は進学の関係で、ちょっと不利になる可能性が高くなる。その辺を学生がどう納得していくかというところが大きいと思う。

【志摩委員】

- 高校生で、1か月以内の短期留学であれば、1年生2年生が手を挙げてくるかと思う。
本校は今年度夏休みに、シンガポールへの海外研修を実施したが、1・2年生半分ずつぐらいだった。夏休みがやっぱり良いチャンスである。

【井上委員】

- オーストラリアとか南半球に行く場合は、夏が圧倒的に多い。北半球の学校はサマーホリデーに入っているが、オーストラリアは8月で学校をやっているのも、圧倒的に多い。春休みの3月に実施する場合もある。
- オーストラリアは2月から新学期が始まるので、3月がちょうど都合がいい。春休み3月23日から一斉に外に出るが、そうすると航空券が倍近く上がる。3月の20日ぐらいから

倍近くになり、それが非常にネックになる。新学期に突入すると、引率教員が異動の対象になったり、なかなか難しい。そういうことも鑑みて、最近では思い切って、普通の授業がある時に公欠にさせて連れて行くケースも徐々に出てきている。生徒にとっては、学校で1週間学ぶことも大事だが、それ以上の学びがあるということで、大人数は無理だが、そういうケースも出てきている。

【井上委員】

○目的に応じて留学の時期も変わってくる。

例えば、海外を体験する交流をメインにする場合は、早い学校だと、入学式に保護者に案内を撒いて、その夏には連れていく取組をしている学校もある。

2年生がメインになる場合は、1年かけてSSHのような探究活動をしっかりやって、オンライン等もできればやって、交流先の学校といろいろなことを学び、2年生で現地の学校に連れて行き、サイエンス的なことをやりとりするというような、例えばNASAに連れて行くとか、そういう取組をしようと思えば、1学期に入学してきた生徒を3ヶ月後の8月に連れて行くのは、費用対効果からも考えてもったいないと思う。やはり1年間、総合的な探究であるとかSSHで研究してきたものを、オンライン等でやりとりをして、その先で顔を合わせるとか、その目的によって時期というのも様々だと感じる。

○本校では、120人を40人ぐらいに分け、本県との関わりが深いアメリカのシアトル、バンクーバー、ロンドン、パースに、2週間～3週間連れて行き、言語的なものを磨く取組をしてきた。しかし、先ほど伊庭委員からも話があったように、アメリカ方面の料金が尋常じゃなく高いこと、カリフォルニアの法律が変わり西海岸の治安が極端に悪化していて、シアトルもサンフランシスコほどではないが、ある程度の影響を受けていることから、行き先をシドニーに変えている。オーストラリアは治安も比較的良く、銃の規制も効いて安定していて、料金もそれほど高くない。

○問題はやはり費用面である。コロナ前は、この3方面の海外研修の1方面あたり25万程度が旅費だった。パスポート、保険等の費用を加えても30万もあれば十分だったが、今回は、諸費用も含めて38万円であった。ロンドン、バンクーバーも、それに近い金額が1週間でかかるとなると、やはり保護者の中には相当の覚悟を持って入学させているという声を聞く。入試の志願者の数も、例年170名だったのが、徐々に減ってきており、少子化もあると思うが、やはり「行きたいけれども・・・。」という声を聞くのが事実である。

○阪神間で短期間の海外研修を希望者で実施している学校は、私が調べただけでも、公立学校では17校ある。例えば夏休や春休みに海外に連れて行く時に、何が一番困っているかというところ、生徒だけでなく引率教員の旅費も非常に上がっているが、その旅費がどこからも出ない点だと聞いている。

○もうひとつが、国の体制がいろいろ変わっていることである。今まで受け入れてくれていた学校の体制、地域の体制が変化している。これまで日本語の教育をしないと日本との交流に熱心だった教員がコロナ禍で退職したり、間を取り持ってくれていた方が廃業したケースがあり、自分の私費で取り繋いでくれてた方がいないというような体制の変化も大きく、難しいと感じている。旅行代理店からも、現地の旅行代理店の出先の機関

と連絡をとろうとしてもなかなか繋がらない、難しいという話を聞く。

難しいと言っているけど仕方がないので、活路を見いだしたのは直接交渉である。校長が先方の学校長に直接メールを送り交渉し、本校では、テネシー州の州立大学とハワイ州の州立大学と直接提携を結び、いろんな試験無しでも入学させてもらう指定校となった。その州の州内の学生の授業料で、本校の生徒を受け入れる提携を結んだが、相当プロセスを経てやりとりをしないとたどり着かない。提携を結ぶスキームみたいなものが、県教委等であれば助かる。

【海保委員】

- 国際的な視野の育成ということでは、高校生になって、社会課題についての理解が深まった時点でいろいろな仕掛けを用意して海外に出していくというのも当然、効果的だが、グローバルマインドセットの育成自体は、初等中等教育 12 年間かけて行うべきもので、高校で急に国際的視野を持つと言っても無理な話である。やはり 12 年のうちの初等・中等教育前半において様々な教科の枠を超えて、グローバルマインドセットを育成する教育が大事だと思う。例えば SDGs などの取組にしても、ローカルの取組だけを扱うのではなく、SDGs の良いところ、逆に恐ろしいところが 1 つの国際基準ですべてを評価することである。ベルテルスマン財団の達成状況の評価でも日本は、指標の 12、13、14、15 はいまだに赤がついている。同一指標で国際比較されると日本の良いところ悪いところが見えてくる、これがグローバル社会だと思う。すべて国の枠がだんだん取り払われてきて、人・物・資源の流れが国の枠を越えて流れていく。その中で、様々な指標というのも、統一指標で測られる。そういった各国の取組を評価する中で日本の良いところ悪いところはどうかという、そういう SDGs の取組なんかも小学校からできる。そういう事業をする中で、やはりグローバルな視点、そこがあってこそ高校生でしっかり議論したら飛びついてくると思う。
- 海外派遣は、本校の場合は 20 年以上、夏休みに 2 週間ほどイギリスの Discovery Summer という団体のプログラムに参加している。イギリスのパブリックスクール（ウィンチェスター、ラドリーという名門校）の校舎で、かなり高度な授業を受け、最後にプレゼンテーションなどをする大変素晴らしいプログラムで 20 年間続けているが、80 万円以上かかった。今年再開し、80 万円は大変だと思ったが、50 人定員のところ 100 名応募があった。弊校の場合は比較的恵まれた家庭が多いということもあるかと思うが、80 万円は簡単な金額ではなく、文科省の国費高校生留学促進事業で、20 人が 6 万円を支援してもらっており、本当に助かっている。6 万円をもう少し拡大していただけると、苦しい家庭でも短期留学が可能になる。
- 本校の場合は様々な取組があり、世界の 11 の私学で国際シンポジウムをやっている。2 名の生徒を毎回派遣しており、アフリカ、ヨーロッパ、南米、北米の様々な私学が加盟している団体だが、参加した 2 名の生徒にとって、大变得るところが大きい。大学レベルで専門的なディスカッションをするため、今年のテーマも「future of work and just economy」で経済学の議論を半年ぐらい担当の者と繰り返しながら、最後に結論というか提言をまとめる非常にハイレベルな会議なので、生徒にも半額の費用を援助している。2 人なので、100 万円ほどかかる。

- 一番問題なのは、付き添い教員の出張手当であり、一番頭を悩ませている。南アフリカで春にシンポジウムがあったが、宿泊費用だけでも 80 万円を超えている。夏休みのイギリスの短期留学でも教員 3 人が付き添ったが、1 人 80 万円ほど出張手当を出し、240 万円で頭を抱えている。円安で職員の派遣が一番問題である。私学も働き方改革で民間企業と同じで労働基準が適用されるので、余分な業務を命じることが難しい状況になっており、教職員の派遣が大変になっている。この辺も支援いただければありがたい。
- 本校も SSH にお誘いいただいているが、生徒たちが主体的に探究を行っているので、学校側があまり持ちかけなくても、自主的にありとあらゆるコンテストに応募している。国際科学オリンピックも今年は 9 つメダルを取っており、生徒の自主的・主体的な活動で成果を上げているので、SSH への参加というのは考えていない。こういう制度も費用対効果というのを考えないといけないので、コストをかけて導入した結果どういう成果があったか指標が見えづらいと思っている。
- 高大連携はやっていないが、ALT ではなくネイティブ教員を導入することが大変効果的だと思う。本校の場合は、3 名ネイティブ教員がいるが、2 名は特別免許状を兵庫県から授与されており、学年団のスタッフとして 2 名とも学年主任をしている。生徒との交流の深さが ALT とは段違いで、日頃の日常の活動の中で交流ができるというのは見ていて大変効果がある。このネイティブ教員を増やす取組を進められたらと思う。

【井上委員】

- 短期は単独かグループで留学しているが、長期はほとんどが単独留学である。はじめて留学などで補助をうけ非常に助かったと、校長室まで来て話す学生もいる。思いを持って行きたいという生徒を支援する「トビタテ！留学 JAPAN」は、特殊性があり、今年は 5 名申し込んで 4 名採用された。全員が非常に特徴的な、例えば、自分で起業している生徒であるとか、ダンスで世界大会に出たような生徒がニューヨークのダンススタジオへ行ったり、家が医療関係で病院の技術を・・・など、何か 1 つ持っているような生徒や、非常に頭脳明晰でサイエンス的なことに興味がある生徒が、このトビタテ！に採用されるケースが多い。単に本当に 1 度海外に行って、自分の培った英語力を試してみたいとか、海外と交流してみてまずドアを開けたいという子どもたちへの留学支援があれば、それから先に旅立っていけると思う。

【海保委員】

- 特に長期の単独の留学というと、学校としても自分たちの教育活動プログラムに自信を持っており、自分たちのプログラムを経験して欲しいという思いもあるため、1 年間空けて留学へ行くことは、積極的にはすすめていない。

【井上委員】

- 本校はそのための学校なので、「出て行けるんだったらどんどん行きなさい」といつている。そこで学んでくるものも大きい。

【山口委員長】

- 大学も、集団で海外で調査活動をする名目で、派遣する場合は教員が帯同している。単独で交換留学に行く時は1人で、学校の教育目的の中で派遣する場合と、個人のキャリアのために派遣する場合で少し状況が違い、人数的に言うと集団が多い。大学生は大人なので大分違いはあると思う。

【塩出委員】

- 弊社に入社する学生は非常に教育レベルも高く、理解力が非常に高い学生が多いが、一方で、グロースマインドセット（自分の才能や能力は、経験や努力によって向上できるという考え方）やグローバルコミュニケーション・リーダーシップといったところが、海外の学生や海外からの新入社員と比べて圧倒的に引けを取ってしまうと見ている。グローバルの場で活躍するとなると、多国籍であり、多言語の人たち、多様なバックグラウンドのある方々と一緒に働くわけで、そういった方々と意思疎通をする時には必ずしも英語が流暢である必要は全くなく、わからないことをためらわずに聞けるマインドを持ってくださる方が非常に必要になる。
- あとは失敗のとらえ方が、日本の学生と海外の学生の違うところである。自分の成長を信じることで、その中で失敗を前向きにとらえることができる人は、グローバルの企業で非常に伸びる方だと思うが、そのあたりの経験がなかなか日本の教育プログラムを経てきた学生には足りない部分であり、そこに慣れてもらうのに何年かかかってしまう。そうすると入社スタート時は一緒だが、海外で採用された方々の方に、どうしてもアドバンテージがあるというのが今の現状である
- そういったところを補うために、できれば中高ぐらいからやってほしいと思うのが、ディベートするとか、プロジェクトを渡して自分で目標を設定し解決していくプログラムを取り入れていただくと、そういうことにも慣れてくると思う。まさにこれが海外の中高で、小学校からだと思うが経験してくることだと思う。
- 円安の中で留学が難しいという話があったが、兵庫県下にインターナショナルスクールで非常に優秀なところがある。そういったところとの交流を通じて、留学とは言わないが、海外の教育プログラムを経験することは可能だと思うので、ぜひそういうことも検討したら面白いと思う。あとは海外に駐在している子女が夏休みに帰ってきて、長くて2ヶ月ぐらい日本にいる。6月の中旬ぐらいに帰ってきて、日本の高校中学を経験したいという希望がある。ただ、1人2人を受け入れる体制を整えていただくのが難しく、なかなか受け入れ先を探すのも大変である。そういった方々を受入れるだけでも、海外の経験をしている人との交流の場になると思うので、検討したら面白いと思う。

【山口委員長】

- オーストラリアからの留学生を高校2校で受け入れてもらい、2ヶ月ぐらい一緒に授業を受けさせた。高校の探究で英語の発表をするような準備もされてるので、非常にうまく受け入れていただいたと記憶している。
- 県立大の国際商経学部には120名ぐらい日本人以外の学生がいて、県立高校の生徒が大学に来て発表等を行っている。国際化教育で発表を聞いてくれる人がいないという問題が生じている。国際化をやっている高校の先生が、一生懸命いろいろ教えて発表もでき

るようになって、生徒が成果を発表する場がないという問題があり、英語で発表したいが誰か聞いてくれる人はいませんかという状態になる。

兵庫県ではALTの先生をたくさん雇っているのですが、学期の終わりぐらいにALTの先生が何件かはしごして発表を聞く、ALTの先生も何回も聞くことができないので、一発勝負になるといったことが起こっている。せつかく資源として、120名ぐらいの英語の発表の方が簡単といった学生がいるので、うまく利用して高大接続とかできればいいと思う。高大接続で県立大学や甲南大学も、貢献ができると思う。

【伊庭委員】

- 甲南大学のイヤーインジャパンプログラム (Year in Japan Program) に、毎年、50人ほど英語圏から留学生が参加しているので、そういう学生と兵庫県の高校生とが交流する機会を設けるなどすれば、留学生にとってもすごくいい経験になると思う。

【山口委員長】

- 兵庫高校の国際化のイベントに留学生を派遣しているが、いつの間にか親しげに話すようになり、最初は構えてた高校生が、帰る時は一緒に写真を撮ってline交換しているのを見ると、接触する機会をきちんと作ってあげると、上手にそういう機会を活用して自分の英語力を高めたり、すごく上手にコミュニケーションが取れるようになっていて、すごくその辺りは面白いと思う。
- どのタイミングでどの支援をとというシナリオが今のところ何もないので、ある程度、この時期にこんなことをしてというシナリオみたいなものがグローバル人材育成の中にあれば、大学の場合、グローバル人材になるというのと、一度グローバルカンパニーで働いて海外へ行き、いかに鮭のように戻ってくるかというホームタウン回帰の仕組みを少し入れ込んでおかないと、ここで作ったグローバル人材はどこでも欲しい人材なので、必ずしも兵庫県に戻ってくるかどうかわからない。そこをどのように、鮭のように兵庫県に戻ってきてもらえるようにしていくかが重要である。

【山口委員長】

- 県立大もそうだが、現地費用等が上がっているの、教員がついていくと教員の費用が上がる。多分高校はもっと状況が厳しいと思うので、忘れがちな引率教員のところもプラットフォームとして整理していくことも考えておいたほうがいいと思う。

【井上委員】

- 本校が海外行くときは必ず日本と兵庫県の紹介のプレゼンテーションを向こうの学校で行うこととしているが、驚かれることが多くて、兵庫県からこういうものが発信されてるんだとか、そういうことは絶対必要で、一人一人がアンバサダーだと、私はいつも言っている。そういう取組を国際高校だけじゃなく、それぞれの学校の生徒のレベルに応じてやってもらえたらと思う。

【山口委員長】

- 本学では、兵庫菓子業組合と連携して和菓子の作り方を学んで、自分の国でどういうふうにそれを売れるのかとかいうプログラムをやっているが、多分そのような一環でフィールドパビリオンもいいと思う。
- 県立高校とか私学でも、教員派遣の費用が足りないという話が出てくるとは思わなかったもので、そういうところをちょっと深掘りして、次の会議に続けていき、兵庫でグローバル人材の育成をするストーリーが最終的に作れて、県がどこを支援するのか、学校がどこやるのかが見えて来るといいと思う。